

東京都内でグローバル人材の紹介と企業のDX推進を支援する事業を展開するYさんが、地元の倫理法人会に入会したのは、二十歳の時でした。いくつかの企業に就職したものの長続きせず、転職を繰り返すうちに、自暴自棄になっていました。

そんな折、知人から経営者モーニングセミナー（以下、MS）に誘われたのです。MSの参加頻度を増やしていくと、生活リズムが夜型から朝型へと変化し、心身ともに整っていくのを実感しました。仲間もできたこともあり、毎週欠かさず通うようになりました。

ある日、会員のKさんから「倫理法人会の運営をサポートしてほしい」と声をかけられます。Yさんは、活動を通じてKさんの考え方や仕事に対する姿勢に深く感銘を受けていたこともあり、申し出を快く引き受けました。

ところが当時、Yさんは会社での営業成績が思うように伸びず、連日残業が続くなど、仕事に追われる日々を過ごしていました。そのため、Kさんから依頼されたことの大半をやり遂げられず、倫理法人会の活動にも満足に参加できない日が続いていたのです。

そうした悔しさとともに「なぜこんなにやることが多いのか」と不満を感じ、営業成績が上がらないことを「〇〇のせいだ」と責任を外に向けるようになっていったのです。

ある日、Yさんは思い切ってKさんに現状を打ち明けました。するとKさんは、「仕事に追われている時こそ、目の前のことにベストを尽くすことが大切だよ」と言われました。その一言をきっかけに、Yさんはこれまで



目の前の仕事にベストを 尽くして現状を打破せよ

の人生を振り返るようになりました。転職を繰り返した原因はいつも現状への不満でした。希望する部署に配属されないことへの不満から、副業にも手を出し、納得できないまま働いていたのです。

Kさんの言葉は、Yさんにとって自分の仕事への姿勢を見つめ直すきっかけとなり、心に響きました。そしてYさんは、「まず目の前の仕事に全力で向き合おう」と心に決めたのです。それ以降、不満を戒めながら業務に取り組むことで、自然と集中力が高まり、これまでとは比べ物にならないほど効率的かつスムーズに仕事が進むようになりました。

すると、あれほど時間がないと感じていた毎日に、少しずつ余裕が生まれ、倫理法人会の活動にも継続して参加できるようになりました。日々の充実感は増し、気づけば営業成績も向上し、給与の大幅アップにもつながりました。そして数年後、長年の夢であった現在の仕事へとつながっていったのです。

倫理研究所の創立者である丸山敏雄は『万人幸福の栞』第十条「勤労歓喜」の中で次のように述べています。

**つまらぬ仕事だとか、いやなことだとか
考えて、仕事の好ききらいをする。こうし
た人は、一生涯たましいを打ちこんだ仕事
につく事は出来ず、人生のまことの喜びを
満喫する事は出来ない。**

思い通りに進んでいるかどうかに関係なく、まずは目の前のことに全力を尽くす。その姿勢こそが、仕事の中に喜びを見出すための活路を開くのではないのでしょうか。